

立川でウドを作る：継承財としての農業空間

Cultivating Udo in Tachikawa, Tokyo: Agricultural Space to Inherit Urban Agriculture

学籍番号 47-206728

氏 名 澤登 芳秋 (Sawanobori, Yoshiaki)

指導教員 福永 真弓 准教授

第1章-① 問題の所在

近年、都市農業はますます重要性を増している。1950年代半ば以降、人口増加や産業集中により住宅需要が拡大した都市部の農地の多くは、新都市計画法(1968)のもと優先的に市街化を進めるべき区域に指定された。その後、住宅需要は一時落ち着いたものの、1980年代半ばには市街化区域の地価高騰問題が再燃した。改正生産緑地法(1991)によって残存していた農地は生産緑地と宅地化農地に分類され、後者の開発が進行した。このように、都市農地は大方不要なものとしてされてきた。しかし、都市農業振興基本法(2015)によって都市農地の多面的機能が評価され、保全の必要性が明記された。そして農地は都市に「あるべきもの」という考えが広がってきた。

それでも農業を継続していくことは簡単ではない。これまで多数の零細農家によって維持されてきたが、農業従事者の高齢化や後継者不足は深刻であり、農家のみで維持するのは困難な状況にある。これらの問題に対して制度面においては、担い手確保のため、事業者の参入を奨励し、企業的经营によって農業の発展、存続を推進させていくことを標榜している。一方で、異なるアプローチとして、流通や消費に工夫をして、消費と農業継続の社会的ニーズを増や

そうという試みが行われている。

一方、本論文では上述した都市農業の現実を別視点から捉えてみたい。一つ目は、都市農地を所有するのは農家であり、その所有者の意向に農地の存続が委ねられているということである。もう一つは、農家は経済活動としての農業だけでなく、地域の歴史や文化、品種なども残してきたということである。都市農家の状況を見ると、多くは不動産収入などで家計を安定化させながら、農家としてあり続けてきた。なぜそのような状況の中で、農業をやめないのか。それは農業に意味を見出しているからであると考えられる。

松井(1998)は、マイナーサブシステムを経済的な意味が小さく労働としても厳しい活動であるにもかかわらず、当事者たちの意外なほどの情熱によって継承されてきたものとした。ここで想定されるのは、生活の中心にある主要生業と経済性の高いものが一致している状況である。現在の都市農業は、収入源が農業から不動産、副次的生業が農業へというシフトが起きている。都市農業が置かれた状況を考えると、副次的な経済効果のみで継続は説明できない。そのためマイナーサブシステム化していると言える。多くの都市農家にとって生活の中心にあるのは農業であり、元々の形と

はねじれの構図にある。しかし、そのマイナーサブシステム化によって都市農業が支えられてきたと仮定し、さらにその要因について考える。

都市農家の存続に関する研究は、農家と市民とがいかに共同できるかという点に主眼が置かれてきた(水上 2019)が、これらの研究は経営面に終始している。農家の家計に占める農業経営の比率が低い現状では、これらで農家の継続を説明することはできない。従って、農家の日々の作業に注目し、何が影響を与えているのか観察することが重要である。

ここで示唆的なのが米村(1999)である。米村は「家」がどのように存続されてきたかについて分析した。「家」であるかどうかを確かめる際に重要視されたものが家財や暖簾、血縁などの継承財であり、その有無が血縁を超えた人々をも包摂する「家」として連帯できるかどうかに関わっていたとした。本論で扱う東京うどは、換金性が高い農業として産地が拡大したが、需要や価格の低下からその優位性を失い、産地は縮小した。それでも生産は続いており、各農家によって品質の高い真っ白なウドが作られる。農家はいかにして東京うど農家であり続けることができたのだろうか。経済的状況、社会的状況、農業を営む農家の日々の作業やライフヒストリーに注目して分析し、東京うど栽培を続けている農家の実情を描き出す。

第1章-② 研究の手法

本研究では、参与観察として立川市の東京うど農家の下で年間を通した農作業を行い、また東京うど農家や市内外のウド関係者に対してインタビュー調査を行なった。

第2章 東京うどという品種

まずウドについて概要と栽培化の歴史に簡単に触れた後、東京うどの導入から発展、減少に転じるまでの歴史を、品種、産地、栽培方法・技術、品種という切り口から概観した。品種については、1900年代前半から肌の白さが高評価を得るポイントになっていた。栽培方法・技術については、促成と白さを求め、ムロも改良され続けてきており、最終的には自然環境からの脱却を果たした。しかし、残ったのは穴蔵軟化であり、技術が意図的に止められたことが示唆された。なお、それは栽培や品質という点において判断がなされたものと考えられる。

第3章 ウドの街 立川

立川市とその農業の特徴を記述した後、立川市の東京うどについて簡単にまとめた。立川市に東京うどが拡大した大きな要因として、関東ローム層という地質上の特徴があり、そこに作られたウドムロは東京うどの品質を支える良好な環境を保持していた。

第4章 ウドとくらす

Yを中心にウド農家がいかにしてウド栽培を継ぎ、ウド農家として人生を送ってきたのか記述した。Yは、大量出荷の時期にウド栽培を受け継いだが、その後苦戦を強いられるようになり、より品質を重視するようになった。Yには明確ではないものの理想とするウドがあり、そのために長年研究を重ね、特にウドムロに関する工夫が多数見られた。そして、ウド栽培はYの人生にとって大きな意味を持つものになっていた。従ってマイナーサブシステム化していると言える。さらに東京うどの認知拡大のための試みから、ウドムロで作ることが重要視される姿が浮かび上がってきた。

た。ウドムロで作ることが他産地に優位な品質を実現する条件として認識されていた。

第5章 東京うどをつくる

東京うどを育てる作業を1シーズン通して記述した。4月から11月に東京では次年度に養成するための種株養成、群馬県では伏せ込むための根株養成が行われた。11月から3月は、東京に戻ってきた根株を仕分け、伏せ込むために芽を調整し、ウドムロに伏せ込んだ後、30日ほどで収穫した。ウドムロでの作業は、品質や収穫量に直結する最重要の作業であった。12月から4月は次年度に栽培する種株を準備した。東京圃場でウドの地上部の刈り取りと掘り取りを行なった。そして、一芽ずつに割り、殺菌剤処理をした。これら作業は、ある程度数値データをもとにした、作業の型があるものの、多くはウドと対峙して判断されていた。従って栽培は全工程を通して農家個人の感覚が重視される技能の上に成り立っていた。

第6章 都市農業をつづける

都市の農業に関する制度の変遷とその中で農業を続けるウド農家の姿を描き出した。都市農業は長らくその継続と都市化が競合関係にあり、都市環境において農地は重要視されて来なかった。しかし、都市農業振興基本法（2015）以降、農地の制度的な位置付けは一変し、あるべきものとされ評価されるようになった。そして生産緑地の買取申請期間の延長や貸借が可能となり、これまでより農地は残りやすくなったかのように見えた。一方で、農家の間では農地が減少することは「宿命」と捉えられている。その考えに至るのは自分たちの暮らす宅地の相続税によって農地を売らなければならず、現に農地は減り続けているからである。

さらに農地が減ると農業で生計を立てること自体が困難になり、不動産を持たなければならぬという現実があった。一方、東京うどは外部に委託することで農地がなくてもウドムロだけで維持できることから、農地減少に強いという性質が示唆された。

第7章 東京うどがひろがる

東京うどが立川市内に広がっている様相を、生産とは別視点から捉えた。東京うどをモチーフにした「ウドラ」や非ウド農家Snの語りから、立川市の農業としても、立川市そのものを表すものとしても、立川といたらウドという認識が広くされていることがわかった。そして、それを維持するために、立川市は様々な支援や施策を行っていた。また、それらに共通してウドムロが重要な要素として含まれていた。

第8章 東京うどをつなぐ

東京うど農家が将来へウドを繋いでいくことをどのように考えているか概観した後、新しい形として引き継がれた三島独活の事例について分析した。東京うど農家は、続けていくことが困難な社会状況の中、ウドはなくなってしまうだろうという考えが大勢だった。しかし、歴史や文化、教育といった意味合いから、残していく意思はあり、多くの農家は、集団として活動することの重要性を感じていた。一方でそのために後継者が重要であるとし、消極的にはあるが自分の子供が継いでくれることを希望していた。一方で、第三者への継承を視野に入れている農家もあり、実際に大阪では行われていた。大阪の三島独活は、新規就農でNが引き継いだ。継承で重要であったのは、伝統的な栽培方法と品質であり、その根本には独活小屋の存在があった。つまり

独活小屋が継承財として働いていた。

第9章 結論

東京うど栽培が続けられてきた背景には、継承財として機能するウドムロがあった。長年品質が追求される中で技術が意図的に止められた。それはウドムロで作ることが他の地域には真似できない、高品質なウドができるという認識からであった。その高品質を実現しているのは、関東ロー層だけではなく、Y が長年栽培データを取りながら、ウドムロに様々な工夫を行ってきたからであり、さらに身体感覚によるところが大きいウドムロでの作業を続けてきたからである。品質の高いウドを作るためには時間と経験が必要であり、簡単には習得はできない。特に伏せ込みから収穫までの作業はウドムロの狭さや作業の性質から、農家では決まった人が一人で行う、個人の独断的空間になっていた。従って個人の感覚が重視される技能の上に品質が成り立っていることがわかる。その結果、Y が「まあウドやめちゃうと俺には何も残らねえんだろうなと思ってさ。」と語るように、ウド栽培が人生にとって重要なものとなっていた。つまりマイナーサブシステンス化していた。だからこそ Y はウド栽培を継続しているのである。

さらに過去の Y をはじめとする現世代のウド農家が先代から継承した時を振り返ると、継承したのは「ウドムロで東京うどを作ること」であった。従ってウドムロで作ることが継承され、続いているからこそ東京うどの栽培が続いているのである。すなわち、ウドムロは継承財であると言える。また立川市内の関係者へのインタビューからは、東京うどとウドムロがセットで認識

されており、米村（1999）の継承財の機能に合致する。

さらに、地域内で東京うどはウドムロで作られているという認識が広がっていることは、更なる可能性を示すものである。再び米村の議論を見ると、継承財によって連帯の可能性が広がるとした。これが実現した例として、大阪の三島独活を位置付けられるだろう。三島独活では独活小屋が地域のシンボルであり、そこで行われる軟化栽培は伝統的な方法で品質も高い。独活小屋が継承財としてあったからこそ、新しい形として第三者継承することができたのである。この事例を見ることで東京うどについても希望が見出せるのではないだろうか。

農地減少が宿命であると考えざるを得ない現状にあっては、特に後継者への継承を考えることは困難かもしれない。しかしウドムロで東京うどが作り続けられる限り、東京うどが継続、そして継承される可能性は担保し続けられるのである。これは農地がより残り続けることを意味し、また農業が継続されていくということを意味する。

農地の意向が所有者である農家に委ねられている以上、農家の生活や農作業を細かく見ていくことで、都市農家によって都市農業が継続していく方法を見つけることができるはずである。

【参考文献】

松井健,1998,「マイナー・サブシステンスの世界 民族世界における労働・自然・身体」,篠原徹編,『民族の技術』朝倉書店

米村千代,1999,『「家」の存続戦略：歴史社会学的考察』,勁草書房